



# 日本の未来を木育が創る

持続可能な社会づくりに果たす木育の役割



第4回



# 木育サミット 2017

実施報告書

2017.2.23 [木] 10:00~17:00 ティアラこうとう(江東公会堂)

東京おもちゃ美術館 **林野庁補助事業**

主催：認定NPO法人日本グッド・トイ委員会/東京おもちゃ美術館 共催：江東区

協賛：株式会社長谷川萬治商店、一條ランバー株式会社、東京原木協同組合、東京銘木協同組合、東京木材問屋協同組合、東京木場製材協同組合

後援：東京都、一般社団法人全国木材組合連合会、日本木材青壮年団体連合会、公益財団法人日本住宅・木材技術センター、日刊木材新聞社、一般社団法人東京都江東産業連盟、特定非営利活動法人海さくら、一般財団法人地域活性化センター、公益財団法人森林文化協会、芸術教育研究所

## 第4回 ◆木育サミット 2017 実施報告

2017年2月23日に開催された「第4回木育サミット」。木育の最新情報の発信源であるこの大会は、2013年度の第1回開催から始まり、今年で4回目の開催となった。歴史ある木材の町江東区を舞台とし、暮らしの中に木を取り入れよう運動であるウッドスタートに参画して下さる市町村・企業などを多数迎え、過去最大規模・最大出展者数での開催となった。当日は700人以上の参加者に来場いただき、全国の木育関係者の有意義な情報交換の場となった。本誌ではその開催内容を報告するとともに、「未来の木育」のために、一人でも多くの方がさらなる興味を抱いてくれることを願っている。



### ◆基調講演：「今後の木育に期待すること」 林野庁次長 沖修司

#### 【日本の森林の豊かさ、木とのかかわり】

- 日本の国土は南北に長く、モンスーン地帯にあることから、世界的に見ても豊かな植生に恵まれている。世界には約27万種の植物があるが、日本にはそのうちの約5000種がある。面積がほぼ同じドイツの2600種と比べても、多様さがよくわかる。
- また、国土の約7割にあたる2500万ヘクタールが森林であり、森林率はフィンランドに次ぐ世界第2位。約1000万ヘクタールがスギ、ヒノキなどの人工林で、残りがもともとあった植生の天然林である。
- 古来、日本人と木とのかかわりは深く、『日本書紀』にも、神様のひげなどからスギやヒノキなどができ、スギやクスは船に、ヒノキは宮殿に、マキは棺桶にと、樹種に合わせてうまく利用したことを示す伝説が記されている。

#### 【現在の日本の森林】

- 戦後の復興期、天然林を伐って使い、そこにスギやヒノキを植えて人工林が作られた。その木々がいま、ようやく使えるように育っている。年間1億㎡くらいが使用可能。現在、年間に使われている木材は約7000～8000万㎡なので、供給は充分である。
- 今後は、木を伐って使って植え、森林資源を維持するサイクルをつくりたい。そのためにはまず、「国産材を使う」ことが重要である。建物や道具などに木を取り入れ、人間と同じ「生きもの」である木を身近に感じて暮らすことの豊かさを、もう一度取り戻してほしい。

#### 【木育に期待すること】

- 木育の取り組みは林野庁をはじめ、自治体、企業、NPOなどさまざまな分野に広がりつつある。対象も、赤ちゃんから大人まで幅が広い。今後は多様な活動が連携し、さらなる広がりを見せることを期待したい。
- 木は大気中のCO2を吸収する。伐って燃やせばCO2が発生するが、代わりに植えた木がそれを吸収するため、全体のCO2量が変わらず、地球環境のためになる。また、きちんと手入れされた森は水を蓄え、洪水や土砂災害を防ぐ力もある。こうした木の「パワー」を理解し、「木を使う」ことの意義を「木育」を通じて見つけ直してもらいたい。



## ◆木育サミット基調シンポジウム岐阜県立「森の恵みのおもちゃ美術館」を目指す木育

2019年4月に完成予定の岐阜県立「森の恵みのおもちゃ美術館」に込めた思いや、設立後の活用展望などを、岐阜県庁、建築家、デザイナーそれぞれの立場から語り合いました。

座長：多田千尋(認定NPO法人日本グッド・トイ委員会理事長・東京おもちゃ美術館館長)、腰原 幹雄氏(東京大学生産技術研究所 教授)  
若杉 浩一氏(株式会社パワープレイス)、平出 健一氏(テラデザイン一級建築士事務所)、藤掛 雅洋氏(岐阜県森の恵みの森づくり推進課、木育推進監)

- 藤掛氏：岐阜県の森林率は全国第2位の81%だが、人口約200万人のうち、約73万人が岐阜市、大垣市などの都市部で生活していて、自然との関係は希薄である。森林との関係性を取り戻し、真に豊かな暮らしを実現するために、木育に力を入れたいと考えたことが、「森の恵みのおもちゃ美術館」設立の背景となった。
- 若杉氏：どうすれば子どもたちにとって豊かで幸せな体験ができるかと考え、「建物を建てる」というより、「建物も家具も遊具も、すべてを一つの大きなプレイグラウンドにする」と思いついた。
- 平出氏：「森の恵みのおもちゃ美術館」は、立派な建物で外界との結界を張るようなものではないかと思った。もともと大地や山は、そこを駆け回っているだけで楽しい「遊具」だと言える。それを敷地に置き換え、木で一つの大きなランドスケープをつくらうと考えた。
- 藤掛氏：「結界」という言葉にはっとさせられた。「ハコモノ行政」の弊害はまさに、立派な建物をつくるだけで完結してしまい、そこから発展していかないことにある。この美術館はそうではなく、山や地域とつながっていくことが重要だと、改めて認識することができた。
- 腰原氏：今回は、二股に分かれた木や、曲がりくねった木などもデザインの一部として活かされているため、構造的に心配されたが、すべてクリアできている。山にはいろいろな木があり、それぞれにストーリーがあるので、設計

- 側がその思いを引き継がなければならない。現在、構造解析の技術は進歩しており、さまざまな個性の木を活用することは充分可能だ。そうして考えながらつくった建物だからこそ、愛着がわくのではないかと。
- 若杉氏：木育の大きな目的とは、「森、自分たちの暮らし、子どもの未来など、ばらばらになってしまったものをもう一度つなぐこと」だと考えている。そのため、隣接する美術館、図書館の森につながるデッキをつくる案も考えた。さまざまな事情から、敷地内のデッキに計画が変わったが、森とのつながりは生まれた。
- 藤掛氏：森とつながることに関しては、自分自身にも強いこだわりがある。岐阜市という都市部にできるこのおもちゃ美術館で、山や森とのつながりを取り戻してもらいたい。また、日常的におもちゃ美術館に来られない地域の方のために、「木育ひろば」を県内100か所に常設する計画がある。さらに、「森林文化アカデミー」との連携による人材育成、学校教育との連携なども企画している。
- 多田氏：県内の林業家に「丸太一本の提供で、美術館のひとつ館長になりませんか」と呼びかけたところ、40～50の方が賛同してくれた。提供者が「この柱は、うちの山の木だ」と誇りを持てるような美術館にしたい。
- 藤掛氏：木育によって、子どもたちが生まれ育った岐阜を好きになり、いつか帰りたと思える場所にしていきたい。



# Symposium 01 木育で創る循環型社会～都市型木造建築の可能性を探る～

木育がめざすところのひとつは循環型社会の構築である。その中でも都市型木造建築物は、今後の木育の広がりを考える上で大変重要なファクターである。江東区での取り組みから世界の動きまで、木造建築物に関わる一線級の研究者、エンジニア、行政関係者に話をさせていただき、その意義や課題、展望について皆さんと一緒に考えた。

座長：水谷 伸吉（一般社団法人more trees事務局長）

## 山と社会をつなぐ建築

網野 禎昭氏（法政大学デザイン工学部教授）

- 「山と社会をつなぐ建築」を研究・教育のテーマとし、ヨーロッパの中近世の集落から循環型社会のあり方を考えている。そうした集落の成立背景には、木材の不足があった。限られた資源を有効活用して丈夫な建物をつくり、共同のキッチンでエネルギー消費を抑えるなどの知恵から学ぶところは大きい。
- 現在のヨーロッパにおける木造・木材活用の事例としては、オーストリア最西部のフォアアールベルク州が注目されている。人口数百人程度の村の多くで、中心に役所や保育所などさまざまな機能を兼ねた木造の公共施設を一つだけつくっている。ある村の施設では木質チップのボイラーを備え、エネルギーとして活用。チップ製造で、村に雇用も生まれている。こうした村に共通しているのは、地元の資源(人的・物的)を活用した循環型の社会づくりである。

- 大学では、木・山・町のことを幅広くわかっている建築家を育てたいという思いから、サマースクール「Wood in Culture」を実施。「木と水」「木と食」などのテーマで、人と木の多様な文化を学ぶ機会を設けている。



## 木のイノベーションで森とまちの未来をつくる

松崎 裕之氏（株式会社竹中工務店 木造・木質建築推進本部長）

- 竹中工務店では、「まちづくりを通してサステナブル社会の実現をはかる」をCSRミッションに掲げている。環境への取り組みの一つが木造・木質による国産木材の利用推進であり、森林の活性化、林業・地方の再生に建築で貢献していきたいと考えている。
- 木材利用推進のために、耐火性のある集成木材「燃エンウッド」を開発した。中央に荷重支持部、その外に燃え止

- まり層、いちばん外側に燃え代層の3重構造。火事の際には外周部が燃えて炭化、燃え止まり層のモルタルが熱を吸収し、荷重支持部は燃えずに残る。2016年末には公共工事でオープン化し、多くの建築に利用できるようになった。
- 「燃エンウッド」を使った建物は、すでに全国で6件ある。7件目が、建設中の江東区立第二有明小中学校(仮称)である。

### スピーカー紹介

#### 網野 禎昭

法政大学デザイン工学部教授。1996年渡欧、スイス・ローザンヌにて木造建築を学ぶ。ウィーン工科大学教員を経て、2010年現職。建築が自然に近づくを目標に研究・設計に従事。設計作「木のカタマリに住む」が2015年グッドデザイン賞ベスト100。

#### 松崎 裕之

1986年(株)竹中工務店入社。1987年東京本店設計部構造部門。1996年～1997年マレーシア、2001年～2007年タイに赴任。帰国後2007年から昨年まで東京本店設計部構造部門。入社以来、国内外の構造設計に従事。2016年9月木造・木質建築推進本部発足により本部長就任。

#### 海老澤 孝史

昭和56年江東区入庁。平成17年総務部職員課長、平成21年選挙管理委員会事務局長、平成22年こども未来部長、平成24年総務部長(危機管理室長兼務、被災者支援担当部長兼務)、平成27年5月から江東区副区長(現職)。

## 木の歴史あるまち江東区の木材利用

海老澤 孝史氏（江東区副区長）

- 江東区は江戸時代、木場に貯木場がつくられ、新木場へ移転後も多くの木材の流通拠点となっており、木とともに生きてきた歴史のあるまちである。
- そんな木の文化を受け継ぐため、公共建築物に木材の利用推進方針を定め、2014年4月から実施。床面積1㎡あたり0.008㎡以上の木材を使う目標を設置。これまでの事例では、第二亀戸中学校、豊洲西小学校で0.012㎡の使用を達成。

- 現在建設中の第二有明小中学校(仮称)は、床面積1㎡あたり0.014㎡の木材を使用。5階建の校舎で、子どもたちが木に囲まれて勉強できる環境となっている。学校に求められるのは何よりも安全性であり、災害時には避難所となることも重要だが、耐火性に優れた材を使用することで条件をクリアすることができた。

### ディスカッション

【日本で木造建築がもっと広まるためには、技術やコストの面からどんなことが必要か？】

- 松崎氏：技術開発でコストダウンは可能になる。工期は木造の方が短縮できるが、木材調達に時間がかかる場合が多い。川上から川下までを考えたサプライチェーンの再構築が必要だ。ヨーロッパでも、木造の方がコストは1割ほど高くなるようだが、環境への意識から木造を選ぶ人が多い。日本でもそうした意識が必要ではないか。

【「木育」という観点から、木造建築によって何を育むことができるか？】

- 網野氏：現在の大学教育では、建築家の学生は木のことをほとんど学ばない。何のために木を使うのかという問題は、社会システムの問題にもつながる。そうした点では、木のもつ多面性、総合性は、教育を変える可能性もある。

- 松崎氏：地球環境や森林活性化のためには、木に親しみを持ち、木について考える必要がある。第二有明小中学校のような環境で、木を感じながら育つと、木を勉強したいという子どもが出てくるのではないかと期待している。

- 海老澤氏：学校を木質化することによって、子どもの情緒が安定し、教師の疲労を軽減する効果があると報告されている。木に囲まれた環境で過ごした子どもたちがやがて成長し、木の文化を受け継いでくれることを期待している。

【日本における木造建築のビジョンをどう考えるか？】

- 網野氏：目標は「木造建築をつくること」ではなく、「循環型の社会をいかに実現するか」ということである。日本の社会構造や働き方が変わりつつある現代、木造建築がどう貢献できるかを考えなければならない。

Symposium 06

ウッドスタートの効果を検証する～経済・環境・子育ての視点から～

ウッドスタート (WS) は全国の自治体、保育所、幼稚園、企業に広がりつつあるが、まだ空白都道府県も少なくない。その解消をめざして、地域活性化センターと東京おもちゃ美術館は、2016年に連携協定を締結。都道府県のWS宣言も検討されているという新たな状況の中、先進自治体の首長などからWSの意義や効果をうかがい、全国展開の方策を議論した。

座長：座長：椎川 忍氏 (一般財団法人 地域活性化センター理事長)

◆「アウトドアと木育」地域資源を活かした人づくり

小田 保行氏 (高知県越知町長)

- 越知町には、「水質日本一」にこれまでで5回選ばれた清流、仁淀川が流れている。森林率は84%。山と川の恵みをアウトドアレジャーや自然教育に活用している。2016年、自身が「木育インストラクター講座」を受講したことをきっかけに木育活動に共感し、同年9月16日にWS宣言を行った。
- 現在、仁淀川河畔にグランピング体験ができるキャンプ場を整備中。キャンプでの体験は、自然を身近に感じるとともに、自分の力で食べものや寝る場所を用意する力を養うため、災害時の備えにもつながると期待している。
- 県全体の森林率も84%と高く、全国に先がけて森林環境

税を導入している。今後は県内自治体と連携をしながら、木造建築などによる地元産材の使用を広げ、特に人口が集中している高知市と連携できるよう働きかけたい。

- 木のおもちゃには、子どもの想像力を伸ばす力があると感じる。また、木工教室などでは、手先の器用さや粘り強さなどが育まれるという教育効果も期待できる。
- 子どものころから木に触れることで山・川・森などを身近に感じ、目の前の資源を使う意識を持つようになってもらいたい。また、自然の恵みで五感を磨くことで、感性豊かな人づくりを進めていきたい。

◆「木育」の持つ、地域や世代、産業等を“つなげる力”

持田 末広氏 (秩父市副市長)

- 秩父市は、面積の87%を森林が占め、スギ・ヒノキの人工林は今がまさに伐期であるが、木の消費は伸び悩んでいる。これまで多くの自治体では、林業の振興策として生産側を重視してきたが、これからは消費側に目を向けた施策が重要である。WSは、そのために有効な取り組みだと考えている。
- 2015年3月にWS宣言。地元材を使用した誕生祝い品を贈呈している。「部屋に木の香りが広がり、ほっとする」「木を身近に感じるようになった」と喜ばれている。
- 「生涯木育」をスローガンとし、他の地域、産業と連携しながら、さまざまなライフステージで秩父の森林と接点を

持てるような多角的プログラムを展開している。

- 自治体との連携の例では、姉妹都市である豊島区との取り組み。豊島区の誕生祝い品の中で、秩父産材を使用。約7割の家庭に選ばれるなど好評である。企業との連携の例では、一條ランバー株式会社とともに「森のめぐみの子ども博」に出展。また、秩父市立病院で行われた「ホスピタル・トイ・キャラバン」に、一條ランバーの社員がボランティア参加。その他、木を活かした商品開発などで、さまざまな企業とのコラボレーションが生まれている。
- 木育のもつ「つなげる力」を最大限に活用し、森林・林業の活性化と地域材の利用促進に取り組んでいきたい。

スピーカー紹介

小田 保行

高知県越知町長。  
平成25年12月31日越知町企画課長を最後に退職。高知県高等学校PTA連合会会長など10年間PTA活動に参加。現在、『おち家の挑戦』をキャッチフレーズに「まちが育ち、ひとが育ち、しごとが育つ越知」に取り組んでいる。

持田 末広

1955年生まれ。東洋大学卒業後、昭和54年に秩父市役所に奉職。平成16年秘書課長、平成19年総務部次長兼人事課長、平成22年秩父図書館長、平成25年産業観光部長を歴任し、平成27年から現職。「豊かなまち環境文化都市ちちぶ」を将来都市像として、日本一しあわせなまちづくりに奔走する。

茅野 恒秀

信州大学文学部准教授。専門は環境社会学、社会計画論、持続性学。1978年東京生まれ。法政大学社会学部卒業後、大学院進学と同時に日本自然保護協会に勤務。岩手県立大学准教授を経て2014年から現職。環境社会学理事、自然エネルギー信州ネット理事。

◆ウッドスタートの到達点と今後：地域間連携の可能性と課題

茅野 恒秀氏 (信州大学文学部准教授)

- 新宿区ではWS事業の誕生祝い品の製作を、長野県伊那市の木工職人に依頼している。2016年、研究室の学生とともに、この事業にかかわる職人、行政、林業関係者にインタビュー調査を行った。
- 新宿区と伊那市との縁は、江戸時代、新宿に高遠藩(現在の伊那市)内藤家の下屋敷があったことにさかのぼる。
- 新宿区では、毎年約2000人もの赤ちゃんが誕生。誕生祝い品も、約2000個製作されている。職人への調査では、年間の売上のほとんどを誕生祝い品が占める人や、本業と誕生祝い品の割合が1:1という人など、多くの職人の経営基盤を支えていることが明らかになった。また、パーツ

を分担してつくるなど、地域の職人同士の協業が生まれた。

- 新宿区と伊那市の例は、WS事業の地域間連携のモデルケースとなっている。地域間をつなぐ「縁」を見直すため、地域の歴史や文脈に改めて目を向けるとよいと思う。また、コーディネーターとしての東京おもちゃ美術館の役割は、ますます大きくなると考えられる。今後は事業の持続性(費用や首長交代による打ち切りの不安等)や、質の良い材を確保し、流通させることなどの課題をクリアしながら、バージョンアップが期待される。

座長総括

- 古来、日本の森は豊かな水を育んできた。水は飲料水としてはもちろん、農業や畜産業などの食糧生産にも欠かせないもので、まさに命の源である。山や森林を守れば、その水を守ることができる。日本人が山や森林の価値を再確認し、ともに生きていくために、WSは有効な取り組みだと考えている。
- 地域活性化センターのもつ、全国自治体とのネットワークは、今後WSの輪を広げていくために重要な役割を果たせると期待している。



## Other Symposium & Talk live

## 実施報告

### ◆ Symposium 02：木で育む子どもたちの未来 ～木の持つチカラを子育てに活かす～

子育てに木を活用した先駆的実践事例として、子育て支援ステーションを立ち上げている木育広場の実践、自然とのつながりを重視した保育の中における木育の実践などの紹介を通して、木育で何を育むのかについて考えるシンポジウムが行われた。これらの木育実践の試みについて紹介した後、木の力でどのような子育てができるのか、木の力で本当に子育てがうまくいくのか、それには何が必要かについてのパネルディスカッションが行われた。年

少の幼児に関しては、木育広場等を通して、子育てに関わる親の心を豊かにすることや、年中・年長の幼児、児童に関しては、自然とのつながりを通じた幼児や児童の創造性の向上の可能性があること、それらの実践者に対して支援的な活動ができる行政の関係者育成等の必要性が挙げられた。

中村 令子(子育てステーションニッセ)、関山 隆一(もあなキッズ自然楽校)  
小林 義尚(信濃町教育委員会)、座長：大谷 忠(東京学芸大学)

### ◆ Talk live 03：木育おもちゃの可能性 ～デザイナーが語るおもちゃの向こう側の物語～

全国より3名のおもちゃ作家の方々に登場いただき、作られたおもちゃで遊ぶと共に、作家本人からその思いをお話いただく分科会とした。発表者は、愛知県 ジョイ ライフ ワークス(JLW社)の前野 健さん、山口県 木のおもちゃ壱(MOKU) 守重 シゲ子さん、新潟県 ナカムラ工房 中村 隆志さんの3名。最初に作られたおもちゃを参加者全員で手に取り、感触を確かめ、遊ぶことによって、樹種の違いやデザインを体感した。その後各作り手から、使い手

が森に思いを馳せるために、おもちゃに込められた思いについてお話頂いた。実際におもちゃで遊んだ後に作家の方々の話を聞くことによって、作り手の思いを多角的に感じることができ、また参加者全員で遊ぶ事により交流が生まれ、初めて会われた異業種の皆様とも、語りやすい・学びやすい環境となった。

守重 シゲ子(木のおもちゃ壱)、前野 健(ジョイライフワークス)  
中村 隆志(ナカムラ工房)、進行：岡田 哲也(東京おもちゃ美術館)

### ◆ Talk live 04：女子力で木育を広げる ～木材活用に新しい風を吹かせよう～

初顔合わせの4人で、いったいどんな展開にしていくのか、一抹の不安を覚えながらのスタート。会場のみなさんに、椅子だけ持って近くに集まってもらったところ、ぐっとライブ感が増した。木育の川上～川中～川下からの3人のスピーカーのお話は、とても親和性があり、会場の雰囲気も和やかでみなさん聴き入っていた。特に、創業294年の老舗の歴史を背負い、銘木師という男社会で活躍する中川さんのお話からは、伝統は守るだけのもので

はなく時代に合わせて変わることのできる感度と柔軟さをあわせ持つことが大事ということを学び、そこからもっと木を知りたいという好奇心と木に親しみが湧いてきて、入交さんと山川さんのお話とも自然とつながっていった。分野を越えてつながり共感を生む、これが女子力だなあと感じるトークライブだった。

入交 律歌(小国町森林組合)、中川 典子(千本銘木商会)、  
山川 紀子(グリップス)、進行：前神有里(地域活性化センター)

### ◆ Talk live 05：大人と子どもがふれあう木育 ～ふれあい囲碁の紹介～

「ふれあい囲碁」と木育のコラボレーションにより、木育のさらなる拡大と発展を見出すことを目指した。囲碁棋士九段の安田泰敏さんによる「ふれあい囲碁」の説明が終わり、すぐに、捨て作った特製の木育碁盤を使った碁碁大会が始まった。チーム毎に丸くなり碁碁を楽しんだ後、チームのメンバーに夢を語る「夢大会」を行った。初対面にも関わらず「ふれあい碁碁」の効果により、笑顔で夢を語り合っていた。次に秩父市役所の前島香保さんに秩父の森やそ

こでの木育活動について説明して頂いた。木育碁盤を通して木の温もりに直接触れ、碁碁を通して自然や地域とのふれあいについて楽しみながら考える機会を作ることができた。また、2つの相乗効果により多くの世代に直接木育をアプローチでき、家庭に帰ってからも継続できる木育活動への第一歩を踏み出すことができ

安田 泰敏(一般社団法人IGOコミュニケーションズ)、  
前島 香保(秩父市役所環境部森づくり課)、進行：美甘 知輝(株式会社長谷川萬治商店)

### ◆ Symposium 07：木育を科学する

協賛・企画：東京原木協同組合

このシンポジウムでは、「木育」が教育や活動の手段をさす言葉ではなく「木によって育てられQOL(生活の質)が向上すること」と定義をした。長谷川泰治さんより主旨説明、石井今日子より木質化した子育て支援施設「赤ちゃん木育ひろば」の効果について報告をした。

宮崎良文さんは、最新の近赤外分光法を用いたポータブル脳活動計測機によるデモ実験を行い、木材が人体に与える効果を紹介し

た。現代人は都市生活でストレスを抱えているが、木材は人を生理的にリラックスさせる効果があることが報告された。今後はさらに、医療費削減につながるような研究が進むことが望まれる。質疑応答は、木材のリラックス効果について多数の質問が寄せられ、参加者の関心の高さが伺えた。

宮崎 良文(千葉大学)、長谷川 泰治(株式会社長谷川萬治商店)  
石井 今日子(東京おもちゃ美術館)

### ◆ Talk live 08：伝統工芸に学ぶ木育 ～「神輿」に込められたものづくりの真髓～

講演の最初は、山崎一輝都さんから東京都の地域材利用が2020年東京オリンピック関連工事での江東区内の施設建設に、大いに木造化、木質化が期待され、木育啓発の好機を迎える事例報告があった。次に、神輿師・塗師の藤戸伸治さんからは江東区伝統的な深川祭りの子ども神輿を使った組み立てデモンストラーションを藤戸さんの解説を交えながら、釘を使わない見事な木組みの神輿の構造を理解した。

日本の「木の文化」を形成した伝統工芸のひとつである神輿を中心に、神と人と木の織りなす祭りの意義を考えさせられ、今後木育を推進するには、神と共存できる木材の存在を意識する必要性を共有した。

山崎 一輝(東京都議会議員)、藤戸 伸治(神輿師)  
進行：山下 晃功(島根大学)

### ◆ Talk live 09：とと姉ちゃんの木材監修者が語る木場の未来

第4回木育サミット開催にあたり実行委員長の長谷川泰治さんからのご依頼で、野上ゆきえさんと一緒に講演させていただいた。当日は木育に関心の高い方が全国より参集し、わたくしの分科会にも100名近い聴衆に参加いただいた。NHK朝ドラ「とと姉ちゃん」の「深川の木材問屋 青柳商店」が舞台となる場面の監修をした話を中心にスライドを使い、戦前の深川の木材問屋を再現した屋外やスタジオ内のセット、脚本に関するアドバイスや深川

の活気ある当時の勢い、気づかい、教育等、細かい部分までお手伝いしたことを説明した。また、地域の木材業からの転身や現在の取り組みに関して、普段の仕事以外の自分の思いや考えを改めて伝えることができた。終了後、参加者からお褒めの言葉もいただき、手応えのあるトークライブとなった。

馬田 勝之(三幸林産)  
野上 ゆきえ(東京都議会議員)

### ◆ Talk live 10：セルフビルドによる、小さな家造り ～体を使おう、自分ゴトワークショップ～

1時間半の時間内で2軒の家を建てる。この企画は、木造建築を自分たちで組み立てて造ることを通して、今まで自分たち素人では不可能だと思っていた家造りですらその気になれば自分でできるという体験をしてもらおうと企画した。合板をプレカットしておき、それを釘無し・ネジ無しで組み立てることで簡単に施工できる仕組みを利用している。プレカットされた部材は一人でも運ぶことができる大きさで、容易に取り扱うことができる。完成

時には、達成感からか「完成！」の声が上がった。会の終わりに記念撮影、そして参加者一人一人に持ち帰ってもらうために用意した1/10の模型キットを手渡すと、再び歓声が上がった。このほんのひと時の家造りが、参加者にとって木の家を身近に感じるきっかけになってくれていたら嬉しい。

小林 博人(慶応義塾大学)

◆首長サミット ~ウッドスタート実践報告~

**島根県邑南町(2016年7月ウッドスタート宣言)**  
誕生祝い品の木のおもちゃは、県立石見看護学校木工班が製作。木を活用して「日本一の子育て村」を目指す。

**高知県越知町(2016年9月ウッドスタート宣言)**  
清流「仁淀川」と豊かな森の恵みを生かし、アウトドアや木育で、感性豊かな人づくりを目指している。

**熊本県五木村(2017年1月ウッドスタート宣言)**  
誕生祝い品として、地域材のスギ・ヒノキを使い、村の自然を象徴するものをかたどったパズルを製作。

**岐阜県大野町(2017年3月ウッドスタート宣言)**  
「木育フェア」には約4千人の親子が来場。誕生祝い品には、特産の富有柿をモチーフにしたブロックを製作。

**熊本県津奈木町(2017年3月ウッドスタート宣言)**  
町名にちなみ、「つなげる・つながることを楽しめるつみき」を製作。誕生祝い品として贈呈していく。

**熊本県芦北町(2017年9月ウッドスタート宣言予定)**  
公共施設の木造化を推進している。ウッドスタート宣言後は、子育て環境にも木を取り入れていきたい。

**広島県府中市(2016年3月ウッドスタート宣言)**  
誕生祝い品として、古くから盛んだった家具づくりの技法を活かした「ありがとうつみき」を製作している。

**長野県信濃町(2016年3月ウッドスタート宣言)**  
東京おもちゃ美術館監修による木育ルームを開設。「木の香りの中、親子で楽しめる」と好評である。

**福島県飯館村(2013年5月ウッドスタート宣言)**  
全村避難中の飯館村では、木のおもちゃを取り入れた「子育て支援センターすくすく」で親子を支援している。

**岡山県西粟倉村(2013年11月ウッドスタート宣言)**  
先人たちが大切に育ててきた人工林を、今後50年で生態系の豊かな森を作り直そうと取り組んでいる。

**群馬県みなかみ町(2016年7月ウッドスタート宣言)**  
森を守り、利根川の水を守ることが町の使命。ユネスコエコパークの登録、自然と人間の共生を目指す。

**熊本県小国町(2013年11月ウッドスタート宣言)**  
東京に本社があるIT企業インフォテリアとウッドスタートを機に連携。ともに森林保全活動などに取り組む。

**埼玉県秩父市(2015年3月ウッドスタート宣言)**  
材木間屋の一条ランパー、さいたま市など、さまざまな自治体や企業と連携。秩父の木の魅力を発信している。

◆クロージングトーク ~木育の展望を語る~

佐々木一弘氏(オークヴィレッジ株式会社)

- オークヴィレッジでは2016年、「木育キャラバンセットプレミアム」を手掛けた。日本の木と出会うきっかけになるよう、すべてのおもちゃに国産材を使用。また、それぞれの木の産地を紹介するパネルを設置している。
- 現在、東京都檜原村の森林資源を活かして地域におもちゃ職人を育て、おもちゃ美術館設立につなげる「トイ・ビレッジ」を構想している。東京は森をもつ世界的にも珍しい都市で、木の「地産地消」が可能である。東京でモデルを示すとともに、地域ごとの森林資源の特性を生かして適材適所のものづくりを進め、産業推進に役立てたい。

椎川忍氏(地域活性化センター)

- 文明の転換期と言える現代、自然をうまく活用する循環型の社会であった日本の農村文明に、改めて注目すべきではないか。ふんだんにある森林資源を活かして発展を目指すためには、政府や自治体を中心となって公共建築物に木材使用を推進していくべきだ。「木育推進法」の制定を実現させたい。
- 地域活性化センターと東京おもちゃ美術館は、2016年に連携協定を締結し、すべての都道府県にウッドスタート宣言自治体が生まれることを目標にしている。現在、由利本荘市などで成果を挙げている。自治体との緊密なネットワークをもっている自分たちの使命として、ウッドスタートを広めていきたい。

多田千尋(東京おもちゃ美術館)

- 森林資源が豊富で匠の技術もある日本で、なぜ木のおもちゃ文化が育たないのか！と歯がゆい思いでいる。日本の木を活用し、木の魅力を広める施設として、姉妹おもちゃ美術館設立を進めたい。
- 由利本荘市に計画中的なおもちゃ美術館では、由利高原鉄道の新駅をつくり、鉄道利用者を増やすことも目指している。木育は地域活性化に加え、観光にも効果があるのではないかと。おもちゃ美術館は、地域の林業、木工業、観光をつなぐ可能性がある。
- 今後3年以内に、由利本荘市のほか、長門市、檜原村、岐阜県、富士山などにおもちゃ美術館設立を計画。木で日本を豊かにし、「木のおもちゃ大国」を目指していきたい。



◆当日プログラム

10:00

オープニング 開会挨拶

主催者挨拶：多田 千尋(東京おもちゃ美術館)、  
実行委員長挨拶：長谷川 泰治(株式会社長谷川萬治商店)、共催者挨拶：山崎 孝明(江東区長)

10:20

基調講演 沖 修司(林野庁次長)

10:40

基調シンポジウム：岐阜県立森の恵みのおもちゃ美術館が目指す木育

腰原 幹雄(東京大学)、若杉 浩一(株式会社パワープレイス)、平手 健一(テラダデザイン一級建築士事務所)  
藤掛 雅洋(岐阜県恵みの森づくり推進課)  
座長：多田千尋(東京おもちゃ美術館)

11:50

首長サミット：全国のウッドスタート宣言自治体からご出席の首長のご紹介

12:40 昼食・休憩

13:30 シンポジウム&トークライブ①

木育で創る循環型社会	木で育む子どもたちの未来	木育おもちゃの可能性	女子力で木育を広げる	大人と子どもがふれあう木育
------------	--------------	------------	------------	---------------

15:10 シンポジウム&トークライブ②

ウッドスタートの効果を検証する	木育を科学する 協賛・企画： 東京原木協同組合	伝統工芸に学ぶ木育	と姉ちゃんの木材監修者が語る木場の未来	セルフビルドによる小さな家造り
-----------------	-------------------------------	-----------	---------------------	-----------------

16:50

クロージングトーク：木育の展望を語る

椎川 忍(地域活性化センター)、佐々木一弘(オークヴィレッジ株式会社)、多田千尋(東京おもちゃ美術館)

17:20

次回開催地あいさつ 持田 末広(秩父市 副市長)

17:30 閉会



第5回

木育サミット2018

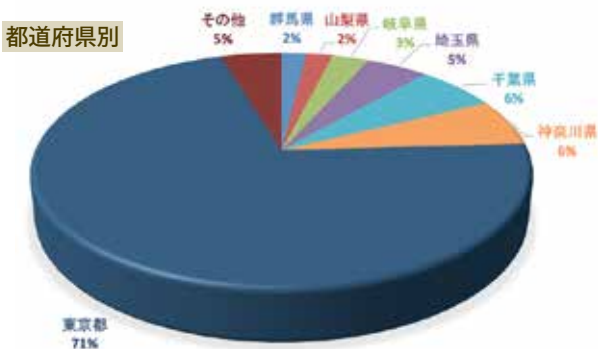
2018年2月24日(土)秩父市にて開催決定！  
詳細は決まり次第、ホームページ及びチラシにてご案内させていただきます。

## 参加者の「声」

- 自身が木に囲まれながら特に関心を持たずに成長し、大人になって初めて木材の良さを自覚した。その経験から、未成年はもちろん、成人への木育をますます広めて頂ければと思った。
- 女子カトークは今までに参加した木育系のイベントにない内容で素晴らしかった。川上・川中・川下、それぞれの方がいて、森のこと、山のこと、林業のこと、森林文化のことをとても魅力的に発信されていた。カッコいい、美しいと感じるスイッチが押された。
- 江東区と木材の繋がりが予想以上に興味深かった。地方の林業と都市の木材を用いたまちづくりに興味があり、木育とそれらが結びついたプログラムで、非常に勉強になった。
- 初めて参加しましたが、大変内容の良いシンポジウムでした。生物多様性の活動に取り組んでるが、今後「木育」の観点も取り入れたいと感じた。

## 来場者属性

都道府県別



職業別



## 主催者紹介

### 東京おもちゃ美術館

東京おもちゃ美術館は、おもちゃを手にとり、触れて、遊ぶことができる体験型の美術館です。手作りおもちゃを作ることができる「おもちゃ工房」や、季節のイベントなど、子どもだけではなく、大人も赤ちゃんも多世代で楽しめる、さまざまなコンテンツを取り揃えております。また、国産の木材のみで作られた「おもちゃのもり」や、赤ちゃんが木の匂いや触り心地をふんだんに感じられる「赤ちゃん木育ひろば」など、木育にふさわしいコンテンツを多数そろえております。



〒160-0004 東京都新宿区四谷4-20 四谷ひろば内  
tel: 03-5367-9601 fax:03-5367-9602

<http://www.goodtoy.org/ttm>

## INFORMATION

### 木育情報のポータルサイト 木育ラボ

これまでの木育活動は、さまざまな団体がそれぞれ取り組みをしてきました。そこで、こうした素晴らしい活動をしている方々の取り組みを紹介し、全国各地に発信していくためのサイトが「木育ラボ」です。このサイトを中心に全国の木育活動をしている組織、団体を結びつけ、より強固な木育ネットワークの構築をめざして活用していきたいと考えています。



<http://mokuikulabo.info/> 木育ラボ 検索